小学１年生の朝の会のフリートークにおける子どもの育ちと教師の役割

～幼小接続の視点もふまえて～

中島　寿子[＊1]・志賀　直美[＊2]・大森　洋子[＊3]・髙田　和宜[＊3]・福田　香織[＊4]

First graders' development and teacher's role in "free-talk" activities in morning meetings :
from view of smooth connecting from kindergarten to elementary school

NAKASHIMA Hisako[＊1], SHIGA Naomi[＊2], OHMORI Yoko[＊3], TAKATA Kazuyoshi[＊3], FUKUDA Kaori[＊4]

（Received August 3, 2020）

キーワード：小学１年生、朝の会、フリートーク、幼小接続

はじめに

附属山口小学校では、朝の会で「話題に沿って子どもたちが自分の考えを述べ合う話し合い活動」であるフリートークを行なっている。この活動には「仲間の考えを共感したり、仲間のよさを感じたりすることができる子ども」を育てたいという願いがある[1)]。附属幼稚園の帰りの集まりでも、子どもたちがその日楽しかったことや紹介したいことを話し、聞き合う時間を設けている[2) 3)]。そのため、附属幼稚園から附属山口小学校へ入学した子どもは、幼稚園での経験をフリートークでもいかしていると考えられる。

2018年度は、附属幼稚園での保育経験がある志賀教諭が附属山口小学校に赴任し、１年生の担任となったため、学部附属共同プロジェクトとしてこのクラスのフリートークを幼小接続の視点もふまえて検討した[4)]。

2019年度も志賀教諭が１年生の担任となったため、引き続きプロジェクトに取り組んだ。メンバーは、前年度のメンバーである志賀教諭、幼児教育教室中島、附属幼稚園で長年の保育経験がある副園長大森教諭、５歳児担任高田教諭に、公立小学校との人事交流で附属幼稚園に勤務する５歳児担任福田教諭も加わった。小学校での実践経験のある幼稚園５歳児担任教諭がプロジェクトに加わることは、幼小接続のあり方について検討する上でも意義があると考えたためである。

１．本プロジェクトの目的

附属幼稚園の保育経験がある教師が担任する附属山口小学校１年生の朝の会について、次の点を検討する。

○　フリートークの中で、小学１年生の子どもたちはどのように育つのか。年度による違いがあるのか。
○　教師は子どもたちの実態をどのように理解し、何を願い、どのような支援を行なうのか。附属幼稚園での保育経験がどのようにいかされているのか。年度による違いがあるのか。
○　小学校１年生のフリートークにおける教師の役割として、どのようなことを大切にするとよいか。

２．方法

２－１　対象クラスと観察の方法

志賀教諭が担任する小学１年生のクラス（男児16名、女児19名、計35名）の朝の会を中島が観察し、文字記録とデジタルカメラによる写真・映像での記録を行なった（計31回）。前年度は観察開始が５月下旬からと遅かったため、４月の入学式の翌週から行なうようにした。映像記録をもとに、子どもや教師の発言を文

＊１ 山口大学教育学部幼児教育コース　＊２ 山口大学教育学部附属山口小学校　＊３ 山口大学教育学部附属幼稚園
＊４ 下関市立垢田小学校（前 山口大学教育学部附属幼稚園）

字記録にもまとめた。記録をもとに、志賀教諭・中島で討議の機会も設けた。高田教諭・福田教諭が担任する附属幼稚園５歳児クラスとの交流場面を中島が観察し、プロジェクトメンバーで討議する機会も設けた。

２－２　他大学の附属学校園の参観

朝の会を大切にしてきた歴史があり、幼小一貫教育にも取り組む奈良女子大学附属小学校学習研究発表会に前年度は志賀教諭・中島で参加したが、今年度は福田教諭も一緒に参加した。中島は同期間に開催された附属幼稚園の公開保育と協議会にも参加した。その内容についての討議も行なった。

２－３　一年間の実践を振り返っての討議

年度末には、記録をもとにメンバー全員で一年間の実践について振り返り、討議を行なった。

３．結果と考察

３－１　一年間の流れ

前年度と今年度では子どもたちの実態にかなりの違いがあったため、志賀教諭の支援にも一年間の流れにも違いがあった（表１参照）。また、志賀教諭は朝の会での子どもの発言を前年度はノートに記録したが、今年度は一日iPad１ページに記録して検索・確認が容易となるようにした。

以下、観察記録と討議における志賀教諭の話をもとに一年間の実践をまとめる。事例についての記述の中では志賀教諭をＳと表記し、子どももアルファベットで表記する（男児：Ａ男～Ｐ男、女児：ａ子～ｓ子）。

表１　一年間の流れ

2018 年度		2019 年度	
【Ⅰ】4~6月	健康観察時に一つの話題について全員が話す	【Ⅰ】4~6月	健康観察時に一つの話題について全員が話す
【Ⅱ】7月	クイズトーク	【Ⅱ】7月	クイズトーク（1）
【Ⅲ】8月下旬	フリートーク	【Ⅲ】8月下旬~9月中旬	健康観察時に一つの話題について全員が話す
~3月		【Ⅳ】9月下旬~2月上旬	フリートーク
		【Ⅴ】2月中旬~下旬	クイズトーク（2）

３－２　【Ⅰ期】健康観察時に一つの話題について全員が話す（４～６月）

前年度と同様、Ｓは入学当初の子どもたちは「従来のフリートークをする段階にはない」と考え、「子ども同士が互いに知り合い、仲良くなれるように」「全員が話したいことがあり、話せる場を作れるように」と願い、健康観察時に話題を決めて全員が話すことができるようにした。具体的には以下のように進めた。

○その日の話題を確認する。
○Ｓから名前を呼ばれ、「はい、元気です」等答え、その日の話題についても話をする。
○最後にＳ、「トラチャン」（手を入れて動かせるトラの人形）も答え、話をする。

Ｓは前年度と同様に、入学式の日に「トラチャン」を紹介し、「失敗してもいいんだよ」「トラブルをチャンスにしていこう」と伝え、Ｓの机の後ろに置いていた。そして、朝の会の最後には子どもが「トラチャン」を手にして、自分が「トラチャン」になって話すことも楽しんでいた（表２【事例１】下線部⑥）。

この活動は入学式直後から始めた。Ｓはクラス全員で学習する場での話し方、聞き方を子どもたちが考えることができるように、よく聞こえる話し方、話の終わり方、「何個まで」話すか等を子どもの声に応えながら確認したり（表２【事例１】下線部①②③）、よく聞いている子どもを「聞き名人」、よく聞こえるように話そうとする子どもを「自分でいいこと考えてる」と認めたりしていた（表２【事例１】下線部④⑤）。

すると、話したい気持ちの強い子どもは始めに「何個までか」を確認するようになった（表２【事例２】【事例３】下線部①）。附属幼稚園から入学した子どもたちは、以前から親しい友達が多いこともあり、当初から緊張せずに話したり、幼稚園での体験を挙げて話すことが多かった（表２【事例２】下線部②）。前年度は国語で「わけをいおう」を学習した６月頃にＳが「わけ」を聞くことを始めていたが、今年度は４月下旬に「わけ」を言う子どもが現れた（表２【事例３】下線部②）。Ｓは今年度の子どもたちは「話すのは上手」だが、他者の話を聞くことや気持ちの調整は難しく、「他者意識が弱い」ためだと理解していた。

表２　健康観察時に一つの話題について全員が話す（日直が話題を決める前の頃）

【事例１】４月15日（月）「すきな海の生き物」（ｅ子が提案した話題）	
一人ずつ元気かを答えて「すきな海の生き物」も話す（一部）	S「すきな海の生き物です」（Sに名前を呼ばれると元気がどうか答え、「すきな海の生き物」も話す） B男「はい、元気です。ワニと」「イルカと」「サメと」「シロナガスクジラと、エイと、タコ、です。それで終わり」 S「終わりがわかんないんだけど、終わりの時はどうしたらいい？①」・「終わりです」・「ありません」S「終わりですって言おうか①」
	D男「すきな海の生き物は、バンドウイルカ（話し続ける）」e子「もう終わりにしたらどう？」SにD男「（話し続けて）終わりです」 S「e子さんが、そろそろ終わりにしたらって言ってたんだけど」「いっぱいありすぎたら②」　m子「時間がなくなる」 S「時間がなくなるねえ」「なので②」　D男「じゃあ、10までにしたら？」両手で「10」と示して S「10までにしようか」「二つも今日言ったよ」「多い人は10こまでね。終わったら、『終わりです』って言ってください②」
	S「i子さん」「一番前だから、後ろを向いて言ってあげて③」　i子：後ろを向く。 f子「立って、ね、後ろ向いたら？そしたら見やすい」　・「立ったら見えるよー」　e子「今度から立ってやろー」 S「そうだね。それもいいね③」　i子：立つ。「すきな海の生き物はー、イルカとクジラとー、くらげ」
	Q男「すきな生き物は、ペンギンに、カメです」　B男「ペンギンも初めて」 S「ほんとね。その通りだ。B男は、聞き名人だね。お話の聞き名人だ④」
	r子（窓際の後方の席）「はい、元気です。すきな海の生き物は、シャチと」「ペンギンです」立って話す。 S「立って言った方がいいなって」「考えてるんだね。すごいなあ」「自分でいいこと考えている⑤」・（全員が話し終えると）「トラチャン」
希望者が「トラチャン」になって答える	S「呼んで。せーの」Sの机の後ろに座らせた「トラチャン」を取りに行く。　○「トラチャーン」　○自分がしたいと言う子どもが多い。 S「i子ちゃん、やってくれる？」「どうぞ、立って」i子にトラチャンを渡し、前に出るように促す。 ○「トラちゃん！」　i子「はい、元気です」　○「すきな海の生き物はなんですか？」　i子「…魚です」トラちゃんを少し動かして⑥ S「（笑）魚だそうです。ありがと」
【事例２】４月19日（金）　「すきな遊び」（Sが提案した話題）	
話題と「何個までか」も決める	S「すきな遊びとかはどう？」「折り紙を折ることがすきですとか」「絵を描くことがすきですよか」　m子「じゃあブランコとか？」 S「うん、そうそう。そんなのが言えそう？」　e子「何個までですか？①」 S「3個までにしましょう」指で「3」と示して　（Sに名前を呼ばれた子どもは、元気がどうか答え、「すきな遊び」も話す）
元気かを答えて「すきな遊び」も話す（G男）	S「G男君」　G男「はい、元気です」「すきな遊びは、うんていと鉄棒です」 S「G男君、虫とりですって言うんかと思った」　e子「コマやないん②」 S「コマと思っちょった」e子「だってね」「昔の遊びの時ね、コマがね②」i子「めっちゃうまかったよね②」e子「めっちゃうまかった②」 S「へー」　g子「ひもゴマ、ひもゴマ②」　附属幼稚園から入学した子どもたちが話す②。　G男「お正月、見してあげよっか」 S「お正月になったらする？」　G男「しよっかな」「コマあったら」　S「学校にもコマあるよ」
【事例３】４月24日（水）「すきな教科」（ｇ子が提案した話題）	
話題を確認し「何個までか」も決める	S「みんなが今までやったお勉強、こんなのがあったのわかりますか？」時間割の教科プレートを黒板にはっていく。・「もう全部じゃん」 S「全部やったから」「g子ちゃんが言ってたんだよね。すきな教科を言ってみたいって」　・「ねえ、何個まで？」　・「何個まで？①」 S「3つにしよう」指で「3」と示して　・「3つ」　・「4こ」 S「4はね、多分入らない」「一つ言ってわけを言ってもいいよ」「P男君、どうしてかと言うとって、昨日言ったよね②」

注）事例はその一部を抜粋している。誰の発言が特定できなかった場合には、名前の代わりに「・」、多くの子どもが発言した場合には「○」と記している。「＊＊＊」はよく聞き取れなかった部分である（以下の事例も同じ）。

日直が朝の会の司会を始めるようになってからは、前年度と同様に日直２名が話し合って話題を決めるようにした。子どもたちは話題によっては話をよく聞くこともあり、「すきな人」が話題の時は一人一人が誰を挙げるかをよく聞いていた。中には「35人」「みんな大好きだから」という子どももいた（表３【事例４】下線部①）。特にＳが話す時はよく聞いており（下線部②）、自分の名前が呼ばれると笑顔になったり安心した表情になったりし、Ｓが最後に「みんな大好き」「仲間だから」「困った時は助け合うし、うれしい時は一緒に喜ぶし」「これからもよろしくお願いしますね」と話した時は、「はい！」と答えていた（下線部③）。このように、Ｓは前年度と同様に、入学当初から「みんな」「仲間」という言葉をよく口にしていた。

朝から困ったことが起きて泣き出したＰ男が日直だった機会をとらえ、Ｓが「相談してごらんよ」と話題にするよう支援したこともあった（表３【事例５】）。話を聞いてなかったり、「生活（の授業）でやればいい」と言う子どももいたが、Ｓは「当番が決めるんだから」と伝え（下線部②）、Ｐ男の話を聞くように促し、Ｐ男に話し方を伝えたり、Ｐ男や事情を知る子どもに問いかけて言葉を引き出したり（下線部①）、発言を板書に整理したりして（下線部③）Ｐ男の「悩み」を全員が理解できるようにした。この話題は、日

表３　健康観察時に一つの話題について全員が話す（日直が話題を決めていた頃）

【事例４】６月21日（金）朝の会　「すきな人」（当番B男・Ｉ子が提案した話題）	
話題を確認する	・「お当番、何にしますか？」　当番のＢ男・I子：話している　　I子「すきな人」 S「お父さんとかお母さんでもいいんだよね。お兄ちゃんでも」・「ユーチューバーとか」・「お友達は？」 S「ユーチューバーでもいい」「人間だったらいいのね」（Sに名前を呼ばれた子どもは、元気がどうかこたえ、「すきな人」も話す）
元気かを答えて「すきな人」を話す（F男）（S）	F男「35人全員です。わけは」「みんな大好きだからです①」　・「35人って、自分加えてじゃん」　a子「S先生も加えて35人」 S「あ、a子ちゃん、先生も入れてくれるって。ありがたい」（最後まで話し、Sの番になる）
	S「S先生が好きなのは、b子ちゃんと、H男君と」子どもたちの顔を見ながら、名前を呼んでいく。 ○じっと聞いている②。　C男「先生、こっち見て」姿勢を正して　P男「もうだめー。もうだめや」 S「P男君とー」　P男「やったー！」ガッツポーズする　S「C男とー」　C男：黙っている　○周りの子ども：笑顔でC男を見ている。 S：その後も子どもたちの顔を見ながら、名前を呼んでいく。「まだ言われてない人いる？」　○口々に話す S「誰を言ってないかな？」　k子：手を挙げている　i子：k子を指さす　S「k子ちゃんとー」　k子：笑顔になる　・「トラチャンは？」 S「トラチャンとー」「今言ったみんな大好きです」「どうしてかと言うと、先生の仲間、一緒の仲間だからです。困った時は助け合うし、うれしい時は一緒に喜ぶし、みんなは一緒に過ごす仲間です。これからもよろしくお願いします③」　○「はい！③」
【事例５】６月26日（水）朝の会　どうしたら二匹のクワガタが死なないか（Ｐ男をＳが支えて提案した話題）	
SがP男や他の子どもに問いかけながらP男が相談したいことを確認する	P男「今日、クワガタを見て、死んでしまいそうやから、どうやったらけんかしないかを考える、えっと」 S「教えてください①」　P男「教えてください」　○聞いてない子どもが多い。②　・「みんな、お話聞いて」 e子「ね、生活（の授業）でやればいいやん」　B男「それ、生活でやればいいやん②」 S「自分が当番の時に決めるんやから、悩みごと相談でもいい②」「もう１回聞いてあげてください①」　P男「クワガタが、今日」 S「もってきたんだけど①」P男「持ってきたんだけど」「けんかしたりしとったら、このままじゃ死んでしまうかもしれん」・「そうやね」 S「死んじゃう。だから、死なない方法と①」「けんかをやめる方法①、どっちでもいいよね」「この方法を考えるんだって」板書する③。 S「P男君、クワガタかうの初めて？」　○口々に話している P男「前もかったことはあるんやけど」「お父さんが」「カブトムシを５匹ぐらい捕まえてくれて、クワガタはちっちゃいクワガタ」 S「今日持ってきたのは何クワガタ？①」・「ノコギリクワガタ」　S「が何匹いるの？①」　N男「オスが２匹おるけん、けんかしちゃう」 S「どうもP男君の心配は、ノコギリクワガタが２匹いるから、けんかになるそうです①」　P男「しんだらこまる」 S「それで、死ぬかも知れないから」「死なないように」「助けてあげられる人」「いい考えがある人①」「言ってみてください」
元気かを答えて自分の考えを話す（一部）	a子「一人はもう一つの、虫かごに入れたら＊＊」　S「虫かごに入れるって」　P男「紙に書いとく」ノートを準備して書き始める。 S「P男君、ちょっとはやいみたいやけん、先生も」発言を整理して板書していく③。
	C男「先生、おりがせますぎる」「クワガタかっとうけん、わかる④」 S「広くすればいいってこと？」　C男「あとさー、ゼリーも２個さ、入れた方がいい④」 S「おり、かごかな？」「いろんな考えが出てくる」　C男「先生、あとさ、土もうちょっといっぱい入れんと④」（全員が話をする）
始めにやってみる方法を決める	P男「教えてくれてありがとう」　B男「どういたしまして」　n子「どういたしまして」　P男「どれもいいんだけど」黒板の板書を見て S「どれを一番に始めようかなって」　P男「一回読んでみる。（ノートをもう一度見て）a子ちゃんの」 S「これをやってみる？」板書のa子の案を示して　P男「からやってみる」　S「これからやってみるそうです」チョークで印をつける。
Sの話	S「相談もできるってことが、今日わかったと思います。」「こんなに考えが出るのはすごいなと思いました⑤」

頃は自信をもって発言することが少ない子どもが、「いろんな考え」を話す機会にもなり（下線部④）、Sは最後に「相談もできる」「こんなに考えが出るのはすごい」と子どもたちに伝えていた（下線部⑤）。

３－３【Ⅱ期】クイズトーク（１）（７月）

前年度と同様に、７月には国語の学習とも関連させて「クイズトーク」を行なった。この活動は「１、２年には、話し合い活動だけに集中することは困難」であるために桂（2006）が考案した「具体物を使ったりクイズの要素を取り入れたりする」「フリートークの低学年版」である[5)]。以下のように進められた。

○「宝物」を持って来た子どもが考えてきた３つのヒントを出す。
　いずれも「質問タイム」（１分）をとり、その中で他児が質問しながら「宝物」は何かをあげる。
○「宝物」を持って来た子どもがその宝物（または写真）を見せながら紹介し、その理由も話す。
　友達の質問にも答える。

前年度と同様に、子どもたちは「自分の宝物について話したい」「友達の宝物が何か知りたい」という思いから積極的に発言し、附属幼稚園で製作物等を見せながら自分の思いを伝えることを楽しむ経験をした子どもたちにとっては、発達や学びの連続性のある活動にもなっていた。Ｓは前年度と同様に子どもたちに話

表４　クイズトーク（１）【事例６】７月８日（月）　（e子：絵本）

e子のヒントをもとに宝物をあてる	e子：前に出て、宝物が入った袋を机に置く。「今からクイズトークを始めます」　○「イエーイ」拍手 e子「ヒント１、四角い形です」　（挙手をして、e子が指名した子どもが話していく） D男「紙とかですか？」　e子「違います」　O男「何色ですか？」 e子「ピンクです」　・「ピンク？」　・「ピンク色の折紙」 r子「本ですか？」　e子「本です」　・「何の本ですか？」　・「紙芝居かも」　・「ヒント２は何だったんですか？」 S「あたり？じゃ、あたりですって①」　e子「r子ちゃん、あたりです」　・「ピンポンピンポン」 E男「見せてください」 e子「ヒント２は、たくさんの絵がかいてありますと言おうとしました」　・「ヒント３は？」 e子「本やさんで売っていますって」　・「答え、言ってるじゃん」
e子が宝物の絵本を紹介する絵本も読む	S「これはって①」 e子「私の宝物は、この本です」絵本を袋から出して見せる。　<タイマーが鳴る>　・「あ、終わった。ちょうど」 S「どうして？①」 e子「どうしてかと言うと」「このポコポコとかいうの（主人公）が、かわいいからです」　・「質問」・「質問まだよ」 S「ここに置いてみてくれる？」　e子：絵本をSの机の機器の上に置く②。　J男「お話を読んでくれるの？③」 S「そうか。それもいいね」「せっかくやけん、見せてもらおうか③」　・「いやん、かわいいー」モニターにうつった絵本を見て S「ちょっと見せてくださいって言う？③」　・「ちょっと見せてください」　・「全部見せてください」 S「最初、ここぐらい読んでみる？③」　e子「これは、世界のどこに住んでいる、小さな小さな動物たちのお話」文を指でなぞって読む。 ○静かに見ている　・途中で話す子どもがいると、n子・r子が両手をヒラヒラする　e子：最後まで読む。　○拍手する。
e子に質問する（一部）	S「このことで質問がある＊＊。はい、どうぞ」　（挙手をして、e子が指名した子どもが話していく） q子「この話の主人公は誰ですか？」　e子「ポコポコです」　k子「どこか一番すきなんですか？」 S「どのページがすきか」「あけてみたらいい②」　e子「ここのページです」　・「私もすきやった」　<タイマーが鳴る> S「また何か聞いてあげてください」「これで①」　e子「これでクイズトークを終わります」　○拍手

し方を確認するだけでなく（表４【事例６】下線部①）、今年度は「宝物」を紹介する際に全員によく見えるように、モニターに映すようにした（下線部②）。絵本が「宝物」だった時には、話題提供をした子どもが絵本を読み、モニターで見ながら全員で楽しむ機会も作った（下線部③）。

この頃になると、Ｓは朝の会を含めた学校生活全体の中での姿をもとに、子どもたちのことを「１・２・３月生まれが多い」こともあり、まだ「幼い」のだと理解するようになっていた。

３－４　【Ⅲ期】８月下旬～９月中旬

前年度は従来の形での「フリートーク」を夏休み明けの８月下旬に開始したが、Ｓは「他者意識が弱い」子どもたちに対して「お互いをもっと知り、いろんな思いの人がいることを知ってほしい」という願いをもっていたため、今年度は健康観察で「自分が話したいことを話す」経験をさらに重ねる時間を設けた。

３－５　【Ⅳ期】フリートーク（９月下旬～２月上旬）

９月下旬に開始した従来の形での「フリートーク」は、以下のように進められた。

○話題提供児が自分の考えた話題を話し、自分の考えも話す（ホワイトボードにも書き、黒板に掲示する）。
○他児が話題について自分の考えを話す（５分）。
○話題提供児が話を聞いて思ったこと等を話す。
○他児も自分の思ったこと等を話す：「振り返り」（５分）。

Ｓは前年度と同様に、最初は自分が話題提供者となり、「ＡとＢどちらがすきですか」という子どもが答えやすい話題（表８参照）でフリートークを実施してモデルを示し、進め方について理解できるようにした。

今年度の子どもたちは、自分は好きでよく知っているが、多くの子どもは知らないことについて、「何がすきか」「どちらがすきか」を問うことが多かった(表８参照)。このことからも、「他者意識が弱い」ことがうかがえた。【事例７】（表５）でも、虫好きのＧ男の話題は「コウチュウとコンチュウどっちがすきですか」であった。Ｇ男はホワイトボードに「コウチュウ」と「コンチュウ」の例を絵でも描いていたが、虫に詳しくない子どもにとってはわかりづらい話題であった。この頃には「質問」がある時には尋ねてよいことになっていたため（下線部①）、何度も質問が出て、Ｇ男はそのたびに説明をしていた（下線部②③）。

この日の振り返りでは、「わからない人もいるから、（ホワイトボードに）絵を描くのがいいなと思いました」という、他者の側に立った意見も出た（下線部④）。Ｓは最後になぜ質問が多かったのかを子どもたちに問いかけ、質問することで理解が深まることを確認し（下線部⑤）、質問に丁寧に答えるＧ男の話し方を具体的に挙げながら「今日一番素敵だなと思った」「お話名人」と言って認めていた（下線部⑥）。このように、Ｓはその時々の子どもの姿を捉え、友達に伝わる話し方、聞き方について確認することを少しずつ

表５　フリートーク　【事例７】　10月16日「コンチュウとコウチュウどっちがすきですか」（Ｇ男）

G男が話題提供をする	G男「今からフリートークを始めます」　○「イエーイ」　G男「今日のお題は」「コンチュウとコウチュウ、どっちがすきですか？」 「ぼくは、コウチュウの方がすきです。なんでかと言うと 羽が固い虫でカブトムシとかの仲間だからです」「みんなはどう思いますか？」 C男「カブトムシってコウチュウ？」　S「質問は手を挙げてしてくださいね①」（挙手をして、G男が指名した子どもが話していく）
「コウチュウ」についての質問とG男の説明	m子「G男君に質問です」「ほかのコウチュウってどういう＊＊ですか？」 G男「例えば、クワガタとか、コメツキムシとか」　・「そうそう」　G男「羽が固い虫」
	L男「G男君に質問です」「さっきm子ちゃんの時に言ったんですが、それ以外に、何がコウチュウなんですか？」 G男「例えばね、ハンミョウとか②」・「バッタ」・「クワガタ」・「カブトムシ」・「テントウムシ」G男「テントウムシもそうやねえ」
	I子「G男君に質問です」　B男「質問て」　・「また？」　I子「カブトムシは、どっちの仲間に入るんですか？」 G男「コウチュウです」「さっき言ったんですけど、コウチュウというのは羽の固い虫です②」・「何がわからんの」<タイマーが鳴る>
	S「f子さん最後です。どうぞ」　f子「またまたなんですが、H男君に質問です」　・「何回目？」　q子「静かにして」両手をヒラヒラして G男「いいよ。質問でも」　N男「時間がないけん急いで」　O男「はっきり頑張ってしゃべる」 f子「G男君は、なんでコウチュウがすきなんですか？」　・「羽が固いからって、さっき言ったやん」 G男「さっき言ったんですけど、羽が固いから＊＊③」　f子：黙っている。　G男「f子さん、わかりましたか？③」・「しょんぼりしとるよ」
振り返り（一部）	S「もう振り返りなので、どうぞ」 G男「みんなのを聞いて」「女の子が」「手をあんまり挙げないかなと思ったんだけど」「手を挙げてたから、びっくりしました」 「みんなはどう思いますか？」（挙手をして、G男が指名した子どもが話していく） b子「コンチュウと、コウチュウのやつが」「わからない人もいるから、絵を描くのがいいなと思いました④」　B男「あ、言われた」」 <タイマーが鳴る>　S「これで？」　G男「これで、フリートークを終わります」　○拍手　S「はい。ありがとうございました」
Sの話・質問が多かったのはなぜか・G男の話し方について	S「M男君。なんか言ってたんだけど、質問が多いのは、なんでと思った⑤？」　M男「コウチュウってまだ難しいと思った」 S「4回目に質問出た時に」「難しいんよ。きっとって」「難しいことには、質問がたくさん出るってことね⑤」「最初に質問をしたm子さん」 「コウチュウとは」「他に何かって」「L男君」「また質問をして。I子さん」「カブトムシはどっちですかって」「f 子さん」「なんでコウチュウがすきなのって」「質問4回して、コウチュウが何かっていうのが少しわかった人が増えたんじゃないかな⑤と思います」 S「コウチュウがこんなものだなって、なんとなくわかってきたよー」手を挙げて見せて　○多くの子どもが挙手する。 S「G男君のおかげで、今日みんながね、コウチュウっていう、新しい言葉を知りました」。 S「今日一番素敵だなと思ったのは、なんとG男君で⑥」　・「え、そうなの？」　B男「あ、わかった」「f子ちゃんの時の」 S「一つ目」「C男君がヘラクレスって言った時に、じゃあコウチュウってことですかって」「確かめたんよ⑥」　○話をよく聞いている⑦。 S「また、続けてこんなこと言った」「I子ちゃんが」「カブトムシはどっちって言った時に」「さっきも言ったんだけど、もう1回言ってあげようと思ってね。そういう言い方と⑥」　G男：じっと聞いている。・「優しいね」 S「f子さんが言った時に、f子さんわかりましたかって言ったんよ⑥（笑）」　B男「そうよ」 S「G男君の丁寧な言葉と」「前に出てお話をするのがあまりに上手なのにびっくりしました⑥」「1年生とは思えん」「b子さんが」「（ホワイトボードを示して）このかきかたを見つけたのもあるけど④」「話し方もすごいし。ぜひ、真似をしてくださいね⑥」　q子「はい」 S「お話名人⑥と名前をつけましょう」「作文名人はね」I男を見る。　I男：うなずく　S「I男君だけどね。お話名人はG男君⑥です」

増やしていき、子どもたちも次第にその話を聞くようになっていった（下線部⑦）。

Ｓはその後、生き物が好きな子どもが多いというクラスの実態をふまえて生活科の単元を構想し、子どもたちと動物園や動物愛護センターに行ったり、獣医学部の先生の話を聞く機会を作り、11月上旬からは雌雄のモルモットの飼育を始めた。どんな動物を飼育するか、名前は何にするか、世話の仕方はどうするか等、全員で話し合いを重ねる中で、友達の考えを聞こうとする姿も増えていった。また、「モルすけ」「ゆきな」と名付けたモルモットにとって自分たちがどうすることが一番よいのかを話し合う中で、相手のことを考える発言も少しずつ増えていった。健康観察で自分が伝えたいことも話せる時には、「前に～って言ったでしょ」と話して「うん」と応える（10月30日）、自分の体験を話して「～な人はいますか？」と同様の体験をした人がいるか尋ねる（11月６日）というやりとりも生まれ、その話し方が他児にも広まっていった。

子どもたちは健康観察の時に「今日の生活（科）が楽しみ」と言うことは多かったが、「フリートークが楽しみ」と言うのは、自分が話題提供をする時が多かった。しかし、【事例８】（表６）の日は、多くの子どもが「ｃ子ちゃんのフリートークが楽しみ」と発言していた。話題提供をするｃ子が前日から「二ねんせいになったら どんな 二ねんせいになりたいですか」とホワイトボードに書いて掲示していたためだけでなく、１年生の学校生活もあと少しという気持ちになってきたこの時期、多くの子どもにとって「話したい」と思う話題であったためだと考えられた。

この日の子どもたちの話を聞き、Ｓは子どもたちの中にある思いを「理想があるんだな」と表現し（下線部③）、一人一人の子どもの発言を具体的に挙げながら、それまで理解してきたことをもとにその子ども

表６　フリートーク　【事例８】12月４日「二ねんせいになったら どんな二ねんせいになりたいですか」（ｃ子）

c子が話題提供をする	c子「今からフリートークを始めます」　○「イエーイ」　c子「今日のお題は、二年生になったらどんな二年生になりたいですか、です。私は」「もっと字がきれいになれる、二年生になりたいです」「なぜかと言うと、今は」「ちょっと字が汚い感じがするんだけど」 ・「きれいじゃん」　c子「二年生になったら、もうちょっと字がきれいに書けるようになりたいからです」「みんなはどう思いますか？」 （挙手をして、c子が指名した子どもが話していく）
自分の考えを話す(一部)	d子「私は、友達といっぱい遊べる二年生になりたいです。なんでかと言うと」「秋休みとか夏休みが終わってから」「友達と遊べてないので」「二年生になったら、いっぱい友達と遊びたいなーと＊＊＊①」　○静かに聞いている② k子「私は、６年生が教えてくれる掃除の」「アドバイスをくれたりするから、それを全部できる二年生がいいです」<タイマーが鳴る>
振り返り(一部)	c子「みんなのを聞いて」「いろんな二年生になりたいんだなというのがわかりました。みんなはどう思いましたか？」 （挙手をして、c子が指名した子どもが話していく） Ｂ男「字がきれいになりたい人がいっぱいいたし」「J男君も字がきれいになりたいから、どんぐらいきれいになるか楽しみです」 g子「J男君とかr子ちゃんは、もう字が上手だから、g子はどんどんおいていかれるなーと思いました」 I男「まだ＊＊あったんやけど」<タイマーが鳴る>　I男「優しくするって言わんかったので」「絶対に忘れんでください」 c子「これで、フリートークを終わります」　○拍手
Sの話 ・理想があること について ・g子について ・I男について	S「いっぱいありすぎて、ちょっと困ったなあ」「３つぐらいあるかな」「みんなはね、誰々みたいなりたいって理想があるんだな③と思いました」「J男君とか、字きれいになるのにね」「まだ頑張りたいって、どんなにすごくなるんだろうって言ってたけど、今頑張ってるっていうことが、きっと二年生でも続くんだよね」「きっとすごい二年生になるし、すごい大人になるんだろうなって思います③」 S「g子さんがね、おいていかれるなというのが」「最近字をきれいにやろうって頑張ってるところで④」・「そうなの」g子：顔を上げない。 S「頑張ってない人はそんなこと思わないんだけど」「心配になったんだよね」「その気持ちが、わかりました④」　g子：うなずく S「最後です。I男君。優しくするって」「一番大事に思ってるんだろうなと思いました④」　q子「やっぱり出た」笑顔で　S「素敵だよね」 S「それがあって」「楽しくなって」「頑張れたりするんだよね④」「I男君の優しさを広げていってください」　I男：笑顔で聞いている。 S「今日のフリートークはちょっと違いましたね」「どうだった？」・「面白かった」Ｂ男「次のことがわかった」d子「＊＊がわかって」
Sの話 ・d子について	S「あ、ごめんね。最後に一つ。d子さんの⑤」　d子：Ｓをじっと見る。　S「d子さんね、実は夏休み明けからちょっとね⑤」　d子：うなずく。 S「友達と一緒に過ごすことが少なくなってきて」「お友達と一緒に過ごしたいなって」「思ってるんだなっていうのもわかりました⑤」「ぜひ誘ってあげてください」「６年生とばっかり今ね、お話することに夢中になっていて」　・「えー」d子：笑顔になる。 d子「たまにさあ」「お母さんに、えっと、最近自分から」「友達と遊んでないんだよねって言ったら」「友達と遊びなよって言われて①」 S「うん」　d子「d子も遊びたいんだけど、どうしてもそっちに行っちゃって①」 S「あ、悩んでるんだって」「誰かちょっと助けられそうな人いる？」「どうやって助けるか教えてくれる？⑤」（挙手した子どもの話を聞く） S「f子さん、どうしてくれる？」　f子「今度から」「私たちが」「話とかかけたら、d子ちゃんもきっと喜ぶかなと思って⑥」 S「幼稚園からあがってくる時心配してたんだよねえ。でも、b子さんが隣やったけんね、すぐ仲良しになったんよね」　d子：笑顔になる。 S「そんな４月だったから」「７月まで元気に過ごしたんだけど」「お休みがあった後ね、お友達が今作りにくくなってるんだよね」 S「g子さん」　g子「遊びに誘う⑥」　S「d子ちゃん、何の遊びがすきかな？」　d子：首をかしげる。b子「d子ちゃん、今日さ、一緒に遊ぼう」　m子「d子ちゃん一緒に遊ぼう」　S「そういうことも、相談する。よかったね⑦」

の思いを代弁していた（下線部④）。特にｄ子のこと（下線部①）はＳ自身も以前から気になっていたため、「助けられそうな人」と問いかけていた（下線部⑤）。子どもたちもｄ子の話は静かに聞いており（下線部②）、自分なりの考えを発言する子どもがいた（下線部⑥）。Ｓはその発言を聞いて、ｄ子の思いも確認しながら「そういうことも、相談する。よかったね」と伝えていた（下線部⑦）。

３－６　【Ｖ期】クイズトーク（２）（２月中旬～下旬）

前年度のフリートークは年度末まで続けたが、今年度は全員が話題提供を２回体験した後、２月中旬からは７月とは違う「クイズトーク」を行なった。子どもたちに変化を与えるために、新たな活動を取り入れてみたいとＳが考えたためである。このクイズトークも「３つのヒントをもとに答えをあてる」というこの時期の国語の学習を発展させたものであり、学習したことを朝の会に取り入れ、ペアで考えを出し合って楽しむことを繰り返しながら、「全体の場で引き上げる」ことをしたいという願いもあった。Ｓは「質問数を限る」「答えを途中で言わない」という方法も加え、具体的には以下のように進めていった。

（○話題提供児がヒントを３つ出す。各ヒントに３名までが質問をする（「○○ですか？」と答えは聞かない）。
○他児が答えをあてる。

このクイズトークでも、「正解したい」という思い、話を聞いて考え合う面白さから、活発な話し合いが続いた。クイズを２名で考えたこともあり、他児にとっても興味をもって考えたり、答えたりできる内容

表７　クイズトーク（２）【事例９】2月27日（木）クイズトーク　（m子・Ｌ男：クイズの答え「チョーク」）

m子・L男のヒント1・2・3を聞き、3名ずつ質問する	m子・L男「今から、クイズトークを始めます」　○「イエーイ」拍手 m子・L男「ヒント1。色があります」　i子「その色って、何色ですか？」　m子「ピンクとか」　L男「いろいろな色があります」 G男「形はどんな形ですか？」　m子「丸くて長い」　f子「それは、どういう時に、使いますか？」　L男「書く時」　○口々に話す。
	m子「ヒント2、長い」　I男「ちっちゃいんですか？」　m子「使ったら、ちっちゃくなる」　○口々に話している。・「おーい①」 ・「みんな静かにして①」p子「それは、何文字ですか？」　L男「これを言ったら答えがわかるから」・「ヒント」・「ヒント3言って」 S「いや、もう1個質問②」　k子「消せますか？」　G男「書いたら消えるかってこと？」　m子「書いて、間違えたら、消せます」
	m子・L男「ヒント3。使ったら、小さくなります」○口々に話す。S「さて、ほかの聞き方、何がある？わかってることを聞いてみる③」 O男「先っぽがとがっていますか？」・「言われた」　m子「とがってないけど」　L男「いや、使ったらとがる時もある」 g子「みんな持ってますか？」　m子「持ってる人も多分いると思います」・「えー」　m子「学校にあるから、みんなはもっていません」 B男「どういうこと？」「学校においてるけどってこと？」　N男「え、答えわからーん」　・「あ、わかったー」　・「答え？」 S「まだ、もう1個質問②」　m子「最後のしつもーん」　s子「何文字ですか？」　m子「それ、さっき言った」 S「最後やけん＊＊②」　・「最後って言ったから、いいやん」　L男「4文字です」　・「4文字？」　○口々に話す。
正解をあてる	m子「答え」　（挙手した子どもにm子・L男が指名し、答えていく）　b子「クーピーですか？」　m子「違う」 c子「クレヨンですか？」　m子・L男「違います」　B男「チョークですか？」　m子・L男「正解」　・「あー」　○口々に話す S「チョークだなって思った人、どのくらいいます？」　○1年生が半数ほど、2年生が1/3ほど挙手する。　・「振り返り」　」
振り返り	m子「みんなのを聞いて」「このクイズ簡単かなって思ったんだけど、いっぱい答えがわかってる人がいたので、びっくりしました」 S「ん？簡単かなと思った＊＊」　m子「難しい」　S「難しいかなって思ったっけど？簡単って言ったよ」 L男「長いですと色がありますでわかると思ったら、あんまりわからない人がいた」・「クーピーもあるし」・「マッキーだってあるし」 S「ちょっと待って。最後まで言わせてあげてね。しゃべっとるよ②」 L男「ヒント2でちょっとはわかったって言ってる人がいたので」「それはちゃんとあってるのかって、＊＊していました」 m子「みんなはどう思いますか？」　（挙手をして、m子・L男が指名した子どもが話をする）
	q子「チョークか、クレヨンか、クーピーか」「全部4文字だから」「どれも細いから」「何にすればいいのかって＊＊＊」 （その後、2年生も話し、2年生の担任の先生も話す。子どもたちはじっと聞いている④。）　・「先生、どうぞ」
Sの話・決め手になる質問について	S「4文字」「q子さんが言ったね。チョーク、クレヨン、クーピー、鉛筆って」「鉛筆って思った人いたんじゃない？」・挙手する。 S「似てる形のもので」「クイズ出すの、どうでした？」　・「難しかった」 S「ちょっと難しかったね。答えに迷ったよね」「決め手になる質問」「何ですればよかったでしょう③」　・「何に書く」 S「あ、何に書きますかっていう質問がある。あとは？」　・「そしたら、すぐわかってしまう」　O男「あと、落としたら、壊れ＊＊」 S「落としたら」「壊れますかっとかいう言い方もある」　・「それはクーピーも＊＊」　f子「粉が出ますか」 S「ああ、粉が出ますかって言い方もある。おお」　○口々に話す　S「そんな聞き方があるかなと思いました③」 S「いろいろなものを想像しながら」「決め手を探す」「質問をまた考えていけたらいいかなと思います③。なかなかいい問題だったね」

が多くなった。【事例９】（表７）は、「フリートーク交流」で２年生が担任の先生と参観し、福田教諭も参観した日のクイズトークである。子どもたちは話を聞きながら自分たちも口々に話してしまうことは変わらないが、ヒントや他児の発言を聞いていないと「正解」がわからないこともあり、この頃には「静かにして」等、互いに注意し合って聞きながら考える姿もよく見られるようになった（表７【事例９】下線部①）。また、最後に２年生や２年生の担任の先生が感想を話してくれた時には、じっと話を聞いていた（下線部④）。Ｓは話の進め方を確認する（下線部②）だけでなく、どのような質問をするとよいのかを問いかけたり、確認したりする（下線部③）という支援をしていた。

３－７　幼小交流活動と奈良女子大学附属小学校の参観

幼小交流活動も重ね、５歳児クラスも生き物が好きな子どもが多かったため、幼小中一貫教育実践研究発表会では、モルモットを大切に育てるために学習してきたことを５歳児に伝える交流活動を行なった[6)]。

２月には志賀教諭・福田教諭・中島で奈良女子大学附属小学校学習研究発表会に参加し、朝の会とその後の学習を参観した。中島は同期間に開催された附属幼稚園研究発表会にも参加し、幼小一貫（初等）教育の「初等中期（５歳児・１年・２年）では「生活や活動の振り返りと見通しの形成」を重視していること、異年齢交流を行なう中で小学１・２年生の朝の会を５歳児が参観する機会もあること、そこで学んだことを幼稚園の朝の会や帰りのお知らせにもいかしていることを確認した。これらの内容についての討議も行なった。

志賀教諭と福田教諭は互いの実践についての情報交換を重ね、福田教諭は５歳児クラスでモルモットの飼育の話をよくしていた。すると、５歳児の中から自分たちで飼育動物の餌や４歳児への飼育当番の引継について話し合ったことを文字化して実行するという活動も生まれた。帰りの集まりで一日を振り返る話し合いも、クラス全員で考えたいことも取り上げながら（例：遊戯室の大型積木をきれいに片づけるにはどうすれ

ばよいか）、これまで以上に大切にしていった。【事例９】（表７）のクイズトークを参観した福田教諭の提案で、朝の会を５歳児が参観することも計画したが、休校となったために実現することができなかった。

３－８　フリートークの内容

前年度は松岡（2012）[1]を参考に、フリートークの内容分類をしたが[7]、前年度にフリートークをした時期は８月下旬から３月まで（話題提供を約半数が３回、約半数が２回担当）、今年後は９月下旬から２月上旬まで（話題提供を全員が２回担当）という違いがあった。そのため、前年度分については全員が２回担当したところまでの内容を取り上げ、今年度分とともに表８にまとめた。志賀教諭・中島がそれぞれ分類すると、一致率は前年度は96.4%、今年度は92.6%であった。不一致部分は二人で協議をして分類をした。

前年度も今年度も最も多いのはタイプ「ア」の話題であった（前述の事例であれば、【事例７】）。しかし、前年度はＳの話題提供にならって当初は「ＡとＢどちらがすきですか？」という話題が多く、次第に「すきな○が何ですか？」「何の○がすきですか？」という話題が増えたが、今年度はそのような傾向はなかった。タイプ「イ」の話題（前述の事例であれば【事例８】）も前年度は次第に増えていったが、今年度はその傾向はなかった。今年度は昨年度よりも「エ　その他」の話題に分類した話題が多かったが、１回目・２回目ともその中にはモルモットについての話題が含まれていた（11月21日「モルモットのいちばんかわいいところはどこですか」、１月29日「モルすけとゆきなのいいところはどこですか」）。

前年度も今年度も、タイプ「ウ」の話題がなかった点は共通していた。今年度は健康観察の時にＳの支援によって、タイプ「ウ」の話題が挙げられたことはあったが（前述の【事例５】）、やはり１年生でこの話題が挙がるには、事前に教師が支援することが必要であろう。

表８　フリートークの内容

タイプ	例	2018年度（8月下旬～2月上旬）			2019年度（9月下旬～2月上旬）		
		1回目	2回目	計	1回目	2回目	計
ア 仲間の好みや生活の様子について問うタイプ	「ＡとＢどちらがすきですか？」（選択肢が３つの場合も含む）	20	2	22（33.3%）	10	7	17（25.0%）
	「すきな○は何ですか？」「何の○がすきですか？」	3	13	16（24.2%）	12	13	25（36.8%）
イ 生活上の気持ちや願望について問うタイプ	「もし○○だったら～したいですか」等　（「もし」がない場合も含む）	8	16	24（36.4%）	9	9	18（26.5%）
ウ 生活上の問題の解決方法について問うタイプ	「どうしたら～できますか？」等	0	0	0（0.0%）	0	0	0（0.0%）
エ その他	ア～ウとは違う問い方をしている話題	1	3	4（6.1%）	4	4	8（11.8%）
計		32	34	66（100.0%）	35	33	68（100.0%）

注）子どもの人数は35名だが、志賀教諭が不在で記録がない日があるため、2018年度・2019年度とも合計が70になっていない。

３－９　一年間の記録をもとにした討議

３月には、プロジェクトメンバー全員で一年間の記録をもとにした討議を行なった。中島が一年間の流れを説明しながら【事例１】（表２）、【事例７】（表５）、福田教諭も参観した【事例９】（表７）の映像記録を一緒に見た上で討議を行なった。討議の概要は以下の通りである。

（１）一年間の記録から、「聞いてほしい」から「聞きたい」に変わっていく小学１年生の育ちがわかる。「すきな○○」は幼稚園児がよく口にする話題であり、小学１年生らしい話題だと言える。このように、子どもにとって「身近」で「必然性」のある話し合いの場を設け、話し合いを支える教師の役割が大切である。

（２）年間を通して、朝の会の時間を活用して全員が「自分が話したいことを話す」場をつくったことは、子ども一人一人の「話したい」という欲求を満たして話し方を育てる上でも、安心して学校生活を送ったり、互いを知り合い助け合う学級づくりをする上でも大切な教師の役割である。特に「聞いてほしい」という気持ちの強い小学１年生の教師の役割としては大切であり、幼稚園における教師の役割との共通点が多い。

（３）健康観察の中で「フリートークが楽しみ」という発言が増えたことには、入学当初は弱かった子どもたちの「他者意識」の育ちが表れており、このように育った１年生を２年生以降でどのように育てていくのかが課題となる。話題についても、話し合いの方法についても、子どもの発達に応じた内容を考える必要がある。以前から指摘されている「発達段階や学年に応じたフリートークの持ち方、意味づけ」[8]について

全学年で考える必要がある。
　上記の討議を行なった後、本プロジェクトの成果もふまえて福田教諭が中心となって作成した附属幼稚園の幼小接続期カリキュラム案についての検討も行なった。

おわりに

　これまで述べてきたように、今年度の入学当初の子どもたちの実態は、前年度とはかなりの違いがあった。そのため、朝の会における子どもの実態についての志賀教諭の理解、子どもへの願いや具体的な支援、その結果としてのフリートークの一年間の流れにも違いが見られた。しかし、志賀教諭が学校生活全体を通して一人一人の子どもの実態を理解することをまず大切にし、国語を中心とした学習経験もふまえて教師としての願いをもち、具体的な支援の方向性を考えるというプロセスは前年度と同じであった。また、教師の側からではなく、子どもの側から考えた必要感を大切にし、子どもが困り感をもっていたり、変化が見られた機会を捉えて支援をしていくこと、子どもの興味・関心をふまえて生活科の単元を構想して子どもたちと一緒に取り組む中で子どもたちに変化が見られるようになったことも、前年度と同じであった。このような支援を行なうことは、幼稚園教諭が入園当初の子ども一人一人について生活全体の中で理解することから始め、子どもたちに合わせて保育のねらいや環境構成・援助を考え実践していくことと共通点が多く、幼小接続の視点から考えても、小学１年生の教師の役割として重要であると考える。また、このような支援は附属幼稚園での保育経験をいかすことで生まれた支援でもあり、志賀教諭自身も今年度もそのことに言及していた。
　今年度は小学校での勤務経験のある幼稚園教諭がメンバーに加わったことで、前年度にはない視点からの実践や提案も生まれた。今後は幼稚園５歳児が小学１年生の朝の会を参観する機会も作り、その成果を検討しながら、幼小接続期のカリキュラムとしても位置付けられるようにしていきたい。

引用文献

１）松岡修司：分かり合い、支え合う関係をつくるフリートーク，奈須正裕監修，山口大学教育学部附属山口小学校，学びの実感がある授業をつくる―附属山口小学校の授業とフリートークの取り組み―，学校図書，pp. 172－175，2012.
２）中島寿子・大森洋子：保育者は「帰りの集まり」をどのように構想するのか，山口大学教育学部附属教育実践総合センター紀要，42，pp. 89-98，2016.
３）中島寿子：帰りの集まりで子どもが「お話したいこと」を保育者はどのように支えているか～ある４歳児クラスの事例をもとに～，日本保育学会第72回大会発表論文集，pp. 257-258，2019.
４）中島寿子・志賀直美・大森洋子・高田和宜：附属山口小学校１年生のフリートーウにおける経験と教師の役割―幼小接続の視点もふまえて―，山口大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要，48，pp. 59－68，2019.
５）桂聖：クイズトーク・フリートークで育つ話し合う力，学事出版，pp. 46－61，2006.
６）志賀直美：第１学年生活科学習指導案（単元「たいせつに　そだてるよ！」），山口大学教育学部附属幼稚園・山口大学教育学部附属山口小学校・山口大学教育学部附属山口中学校，幼小中一貫教育実践研究発表会保育案・指導案，pp. 22-23，2019.
７）中島寿子・志賀直美：小学１年生の朝の会におけるフリートークの内容，山口大学教育学部研究論叢，69，pp. 39-48，2020.
８）山口大学教育学部附属山口小学校平成30年度研究開発実施報告書（第１年次）価値の創出と受容・評価をコアにした教科融合カリキュラムに関する研究開発～「創る科」の創設を通して～，p. 25，2019.